

## 「出会い」に感謝して

旧 大 橋 聖 主 婦 学 校 卒 業 生

学校教育学部学生 篠 岡 真 弓



四国の徳島に生まれ育った私が、広島に暮らすようになって、はや4年になろうとしています。私は、ここ広島で、たくさんの出会いを経験しました。これほど多くの、これほど新鮮な出会いを重ねることができるのは、おそらく、大学時代をおいて他にないような思われます。

私たちが入学した1987年は春の訪れの遅い年でしたが、入学式の当日は、まるで初夏を思わせるほどの陽気に恵まれました。スーツ姿の新入生で満員の電車につめこまれるようにして式場に向かったことまでも、今では懐かしく思い出されます。

初めてみる千田キャンパス——そこは何かを未来に生み出す力、活力といったものにあふれ、私に、自分もまた、その大きな輪の中に入れた喜びと誇りを感じさせたものです。

大学というところは、それぞれの個性と個性がぶつかり合い、互いの生き方や考え方を刺激し合える雰囲気にあるのでしょうか。友人とよべる学生が増えるごとに、彼らの価値観や理想、あるいは自律したものの考え方などから、いつも学ばされる思いがしました。

なかでも、体育会バレーボール部にマネージャーとして入部したことは、私の4年間の大学生活を通じ、最も貴重な勉強であったと思います。目標にむかってみずから厳しさに耐えることも、そこから生まれる固い結びつきも、練習を離れたところにある先輩と後輩のほほえましい関係も、私は、ここで知ることができました。この思い出が、何にもまして、私の大学生活を充実したものにしてくれているのです。

そのかわりと言えば、語弊があるでしょうが、学生の本分とするところの学業については、あまり熱心でなかったことを、あえて、正直に言いたいと思います。唯一、がんばったという満足感を抱き得るのは、卒論ぐらいのものでしょうか。写真はゼミの一同で、鈴木三重吉の小説「千鳥」の舞台となった能美島を訪ね合宿を行なった際に写した一枚です。当時は苦痛ですらあった卒論ですが、書き終えた今になると、苦労したこと、それ自体に大きな意義を覚えます。

最後にもうひとつ学校教育学部 に在籍していたことで得ることのできた貴重な出会いを紹介します。それは、2回生の時から3度にわたって行なってきた教育実習の体験です。まだまだ未熟な私たちにも「先生」と呼びかけてくれる生徒がいることに、どれほど励まされたことでしょうか。彼らの存在は、教師をめざす私たちに素直な感動と、責任感を与えてくれるものでした。

卒業を目前にした今、もう一度、私に恵まれた多くのすばらしい出会いに感謝し、そうすることで、学生としての自分自身にも別れを告げたいと思います。